

特集「海外からの大学引き揚げをめぐる問題とその位相—東亜同文書院大学から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合—」

【論文】

小岩井浄とその時代 —戦前から戦後へ—

愛知大学現代中国学部教授

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章

はじめに

愛知大学第3代学長を務めることになる小岩井浄は、1945年8月15日を上海で迎えた。そしてその時の上海を含む華中、とりわけ長江流域は「支那派遣軍」の総司令部が置かれていた南京をはじめ日本軍の統治下にあり、来たるべき国民党軍による接收⁽¹⁾を待っていた。当時、小岩井は東亜同文書院大学教授であり、国民政府からすでに共産党関係者としてマークされていた⁽²⁾。そして、そのことはまた、教員学生を含む同文書院関係者の早期引揚げにもよい結果を招く事になる。

戦前1945年8月の東亜同文書院大学閉鎖と、戦後1946年3月の愛知大学設立とに関わる重要人物の一人である小岩井浄は民権運動家・議会開設運動家を父に、教育県として知られる長野の農村に生まれ、名門旧制松本中学⁽³⁾の出身者として、大正デモクラシー時期に教養形成期を送り、地方エリートとして東京帝国大学法学部に進学し、「社会主義黎明期」の在学中に社会主義の洗礼を受け、日本共産党の初期党员ともなった。そして、「知識人」として人民戦線などの社会活動に関わった後に逮捕、「転向」後、上海に渡り、東亜同文書院大学に所属することになった。そして戦後、愛知大学創設に関わったのである。一まとめに言えば、戦前期にリベラリズムから社会主義活動家へ転じ、軍部の抑圧を受け、草創期の戦後民主主義に希望を持った人物とあってよい。すなわち、人生の上で、時代の上で極端な変容に直面し、それに誠実に対応しようとした人物であった。本稿は、そうした小岩井浄が生きた時代と、小岩井の「転向」問題、そして東亜同文書院大学の日本本土への引揚げを取り上げ、戦前・戦後の転換期における大学人のあり方を検討してみたい。このことは、戦前期の軍国主義に向かう時代に自我を形成し、社会に関わり、国家権力との対峙の中で屈折を余儀なくされ、中国と関わり、戦後日本の再建に際してはアカデミズムの世界に脚を置きつつ自らの夢を託そうとした姿を見ることができよう。

本稿では、そうした小岩井浄の人生を、特に1945年8月から1946年3月の引揚げに到るまでの時期を中心に検討し、歴史の変動期における一人の知識人と大学の変容を検討する一助としたい。言い換えれば、「転向」と「引揚げ」が本稿のテーマとなる。いずれも近代史における重要なテーマでありながら、十分な検討がなされてきたとは言いがたい。そこで、ここでは「左翼」から「転向」したとして小岩井浄が東亜同文書院大学に赴任し、そして日本の敗戦に伴って「引揚げ」を余儀なくされた時代を見つめ直すことが課題となる。

東亜同文書院の時代

最初に、小岩井浄が教授を務めた東亜同文書院大学について、簡単に触れておきたい。

愛知大学にとって最大の前身⁽⁴⁾である東亜同文書院大学は、同じく前身となる満洲国立建国大学などの在外高等教育機関同様、日本近代の歴史を集約的に表現する大学であると言えよう⁽⁵⁾。そこでは、日本が近代においてなした様々な事柄が、行為者の主観と客観のズレ、行為に対する評価の多様性多義性ととも存在している。第二次世界大戦との関わりに関しても、いまだ評価が確定しているとは言い難い⁽⁶⁾。国民国家の枠組みが大きく揺らいでいる今、またイデオロギーの呪縛から自由になり得る今、東亜同文書院の歴史的評価もまた、さらなる検討の対象になるはずである。

東亜同文書院の創立にあたって、その前身である日清貿易研究所を設立した荒尾精は、日中貿易の振興を呼びかけようと全国を行脚していた⁽⁷⁾。その際、最も強く主張したのは軍事的な勢力拡張より経済面での利益獲得であり、そのためには中国の社会・経済への理解が不可欠、ということであった⁽⁸⁾。日中間⁽⁹⁾の経済交流の歴史はそれこそ古代にまで遡り、その一方で日本の中国に対する理解や視角も、一様ではない。その上で、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期、ちょうど日本から見た中国への態度が、多くの人々にとって、それまでのあこがれあるいは聖人君子の国に対する羨望のまなざしから、日清戦争を経て、戦勝国としての優越意識に転換しようとしていた時、そしてアジア主義の思想的系譜が次第に表面に出始めつつある時、対等な関係を中国との間に取り結ぼうとする意図を持って、東亜同文書院が設立された。その背景には、アモルフアスな思いとしてのアジア主義⁽¹⁰⁾があったことは確実であるが、それを強調することは必ずしも当時の書院設立者達の思いを正確に示すことにはならないであろう。書院設立の何よりの目的は、当時の現実的要請として中国との間での経済活動があった。その頃、19世紀末の日本人の多くが自らの私利私益だけを求めており、そのために日本人と中国人とが一緒に仕事ができない、と荒尾精は指摘し⁽¹¹⁾、さらにその根本的な原因として、日本人の間に十分な中国理解がなされていないからであるとも主張していたのである。そうした呼びかけに応えた者の中に、若き根岸侷がいたことは別所で触れた⁽¹²⁾ので繰り返さない。

その後、本格的に活動を開始した東亜同文書院は、『支那省別全誌』『支那経済全書』などを刊行し、理論による整理や類型の案出を急ぐ中国理解ではなく、実際に則した地域研究の資料を蓄積し、同時に教育機関として多くの人材を輩出していった⁽¹³⁾。そして1939年、それまでの専門学校から大学に昇格したが、その時代はすでに日中戦争たけなわであった。同文書院が置かれていた国際都市上海は、1937年8月には戦渦に巻き込まれていた。しかし、対英米戦開始前であるため、租界は存在していた。それでも、1937年12月には上海大道市政府が日本軍の統治政策の一環として設置され、さらに翌38年3月には中華民国維新政府が陥落後の南京に設けられ、1940年3月の汪政権の先触れとなっていた。その上海を含む中国の歴史状況は、前近代的要素と近代的要素とが入り交じっていたことは周知のことであり、マルクス主義を掲げる共産党といえども内部に前近代性を必然的に包含していたことはいうまでもない。そして、日中戦争という時期にあつて、国民党や日本、汪政権との競合関係を如何に構築し、乗り切つてゆくかは、とりわけ華中にあつて必須の課題であった⁽¹⁴⁾。こうした、中国政治社会の様々な要素が錯綜していた上海は、日中戦争

以前から日本にとって最も近いヨーロッパと認識されており⁽¹⁵⁾、その国際性と猥雑とも言うべき雑居性とによって、戦前日本において思想的挫折を余儀なくされた人々にとって、アジールとなっていた。

東亜同文書院と小岩井浄

①小岩井浄の生きた時代……地方エリートと社会への意識

小岩井浄が上海に向かう転機となったのは、彼自身の社会活動とそれに対する当時の権力からの弾圧、そして小岩井の「転向」⁽¹⁶⁾があった。これは、戦前期の日本において、ファッション的状况の中で自らのそれに抵抗しようとした者の多くが辿った道であった。また、そうした歴史の潮流に対して行った抵抗者の側の教条主義的な対応、また日本社会に浸透していた明治以来の選良意識や、それ以前からの家族のあり方も反映している。すなわち、中国社会における前近代性に共通する要素が数多く見られるのである。そうした要素について中国社会を批判的に見ることは大切であるが、その批判が自らを対象としていることが前提なのである。社会活動や思想的営為に挫折し、「転向」した人々についても、そうした自らを対象化する視角と視点とを持っていたのかが問題となろう。なお、竹内好風のもの言いをすれば、「転向」とは自己を放棄することで外へ向かい、「回心」とは自己を保持する事で内に向かうこととなろう⁽¹⁷⁾。小岩井の場合、社会主義志向から「転向」の後に上海へ向かい、戦後、愛知大学を立ち上げるときには、今度は戦後民主主義に「転向」したとすれば、格闘した思想的社会的相手は外在的存在であったのか、小岩井個人の内面的問題はどうかであったのか、すべてを本稿で明らかにすることはできないが、その一端でも垣間見ることを試みたい。

小岩井浄が生まれたのは1897年、日清戦争直後であり、父宗十は民権運動・国会開設運動の活動家として名の知られた人物であった⁽¹⁸⁾。それは、明治という時代が間もなく頂点に達し、司馬遼太郎のもの言いを援用すれば「坂の上の雲」に手が届きそうな時であった。そして、明治という時代は、個人の立身出世と国家の隆盛とがパラレルに対応していた、或る意味幸福な時代であった。これは、明治国家の体制を批判する人々にとっても、当然の時代的制約であるが、近代特有の国民国家の枠組みで物事を考えている点において、共通の土俵であった。このことはまた、上級学校への進学に関しても同様であった。明治日本における最上級学校であった帝国大学は、国家有用の人材を育成するために設立運営されたのであり、またそうであるからこそ批判勢力も育て得たのである。

小岩井の若き日に、松本中学退学事件がある。時の校長と校内での生徒の自治活動をめぐって衝突し、退学処分となって小学校の代用教員になったが、「検定」を受けて旧制一高に進学する。現在とは教員採用制度が異なるので一概には比較できないが、基礎資格云々以前に、被処分者を採用した自治体には驚きの念を隠せない。また、戦前の複線型学校体系の小さな抜け穴であった検定制度を利用しても小岩井が上級学校への進学を志していた点は、学校が「立身出世の制度化」を可能にする道具⁽¹⁹⁾であったことを意味している。小岩井の場合も、やがて人民戦線運動に関与するが、あくまでも組織者・啓蒙者としての関与であり、指導する側である。このことは、明治日本の国家・社会のメカニズムでは、社会変革を試みる側もやはり社会の上層からであったことに、相応する。それはまた、日

本に限らず、特に非西欧世界において社会主義運動に関わっていった知識人党員が天性の宿痾として自己認識の中に組み込んでいた感情であり、政治的ビヘイビアとしては「勤労」する者への拝跪となって現れる。政治指導の方法論は権威主義から自由ではなく、革命の実際的勝利者の主張への服従となって現れる。ロシア革命の勝利的指導者であったレーニンやスターリンが、卓絶した権威を持った所以である。個々人によって、そこに到るまでの時間や葛藤には相違があるろうが、最終的には思考停止に陥る。社会主義リアリズムを「学び」「受容」していった人々も同様である。しかし、それを批判できる思想的位置に立ちうるものは又、極めて少数であろう。ともあれ、旧制中学で退学処分には遭い、帰農せずに代用教員をやりながらでも一高に進学した訳である。一高の次は、ほとんど躊躇することなく進学先は東京帝国大学となる。旧制高校の教育内容からすれば、帝大に進学する以外の進路は想定されていない。小岩井にとっても、実際には様々な選択肢があったにも関わらず、やはり旧制松本中学時代の仲間同様、一高から東大へという進路に特段の疑問を持ってはいなかったと思われる。つまり上級学校に進学し、良い意味で社会的地位に見合った選良としての責任を果たすのである。これは小岩井でなくとも、当時社会主義を選択した知識人のほとんどが同様であったと考えられる。社会主義という思想で社会を変革することによって、皆が幸せになるのだから、自分はそのためのリーダーになるのだという点に、何ら躊躇はなかったのだと言えるであろう。むしろ、「立身出世主義」との共鳴はこの時期の左翼運動を含む青年運動、政治運動が疑問なく持っていた感情なのであり、それへの反発が運動への関わり方と運動の方向に影響し、また運動そのもののエネルギーに転化するようになってゆくのである。それはまた、別の角度から見た場合、エリートが強さと弱さとがアンビバレントに共存していたと言える⁽²⁰⁾。このことは、「学生」という特権的身分が終了した後の彼らの進路にも影響を与えていると見てよいであろう。

さて、一高入学に当たって小岩井は「吾カ胸中ニ潜ム偉人崇拜ノ血ヲ知ラザリシ宮田九カ月ノ安価ナル小人的生活ニ適当ナル記念物也」と、彼が勤めていた宮田尋常高等小学校の卒業記念写真帳に書き込んでいる⁽²¹⁾。恐らく、小岩井が担当していた子供達が見ることはなかったであろうが、代用教員の仕事に対して石川啄木ほどの誇りや自負を抱いていなかったことは確かであろう。また、一高生の時に京都を訪れた時、宿舎の「余の室に南州翁の肖像あり。余の喜悅之に如かず、夜はその前に（布団を）敷きて眠る」⁽²²⁾と手控えに記している。年齢相応の英雄崇拜とも言えるが、やはり一高時代に読んだ頭山満との邂逅もまた、小岩井に影響を与えていると言える。いわば、明治日本の典型的な良心的地方エリート歩んだ道を、小岩井も歩んだのである。もっとも、後述する東京帝国大学新人会の前身ともなる「黎明会」は、頭山満らの「浪人会」を「危険な頑迷思想」と断じている⁽²³⁾、自らを進歩的位置に措定して民衆を指導する立場からの批判である。黎明会にも、アジア主義に共通する一種のヒロイズムに結びつく明治の立身出世主義のメンタリティには通底するものがあると言うべきであろう。

さて、1919年9月、東京帝大学法学部進学後、小岩井は新人会に加入する。新人会は、周知のように吉野作造門下の学生赤松克麿・宮崎龍介・石渡春雄らを中心に、1918年12月に創設された社会活動団体であり、1928年の「三・一五事件」で日本共産党が解体された翌月、解散が命じられることになる⁽²⁴⁾。時期的には、その前史から考えればロシア革命と同時代、国内的には米騒動、そして植民地朝鮮においては三・一独立運動、中国の五四

運動が起こるなど、内外ともに新たな時代のうねりの中にあった。そうした世界史的事件を目のあたりにした、感受性が強く、なおかつ意識的無意識的にエリート意識を抱える若者は、社会変化の方向に極めて敏感となっていた。もちろん、新人会はマルクス主義組織として発足した訳ではない。「きわめて漠然とした素朴な社会主義・革命主義であり、革命のコースをみちびく理論体系もなく、組織原則という程のものも持たない集団であった」⁽²⁵⁾のである。新人会は、ロシア・ナロードニキの流れに強い親和性を持つ、大正デモクラシーの中から生まれ出てきた共産党以前の社会主義運動・民主主義運動を内包する集団であった。別の表現を使えばヒューマンイズム・リベラリズムであり、大衆主義であった。しかし、新人会が本来持っていたであろうそういう部分は、体系化された理論を持つマルクス主義を前にすると、逆にブルジョア・プチブルジョアの生ぬるい改良主義、あるいは一揆主義と自らを断じるようになり、しかもマルクス主義を掲げたロシア革命が勝利すると、ソヴィエト＝ロシアこそがマルクス主義思想を具現化したものであると認識し、自らが祖国日本に実現すべき理想と理想実現のための唯一の将来計画として、マルクス主義を受容していくのである。加えて、彼等の多くは地方出身のエリートであった⁽²⁶⁾。ひととき、選良意識が強かったのである。

小岩井の新人会での活動で特筆すべきは、1920年4月の信州遊説旅行⁽²⁷⁾であろう。すでに、黄興別邸において学習に励んでいた新人会員⁽²⁸⁾の内、赤松克麿・三輪壽壯・新明正道・山崎一雄・千葉雄次郎らが小岩井とともに東京一甲府一上諏訪一松本一塩尻一長野一上田一長瀬一小諸一東京を一週間で廻るコースであった。小岩井は「第四階級の使命」⁽²⁹⁾と題する講演を行ったと記録されている。その後、新人会は全国の学生運動に影響力を拡大し、同時に学生運動も共産主義思想への傾斜を深めていった。そのため、政府は1928年4月、すでに触れたように共産党弾圧の「三・一五事件」に引き続き、新人会の解散命令を出した。その結果、あらかたの社会主義・共産主義運動は地下に潜行することになる⁽³⁰⁾。

②小岩井の活動と転向

小岩井は、東京帝大卒業後、弁護士として大阪で開業⁽³¹⁾し、労働争議・農民運動の弁護活動に当たった。社会運動に関して弁護活動するような「人手のない大阪に行って、その労働者のほんとの友になり、うんと働こう」⁽³²⁾という気構えであった。純粋な理想主義の側面が窺われるが、穿った見方をすれば、学歴エリートとしての地位を利しての社会活動であった。地方エリートとして最高学府で得た社会的地位を武器として、社会改革運動に関わろうというのである⁽³³⁾。小岩井のこうした行動は、地方エリートとしての出自、5歳で生き別れた父への思慕、そして高等教育を受けられたことに対する屈折した感情、労働者・農民への階級的劣等感に下支えされていたのではないだろうか。

さて、その後1922年、荒畑寒村の熱情に感激して⁽³⁴⁾創立されたばかりの日本共産党に入党した小岩井は、思想的にボリシェヴィズムを受け入れた⁽³⁵⁾。そして、その活動の中⁽³⁶⁾で弾圧を受けて獄中生活を余儀なくされる。1936年12月の「一二・五事件」での検挙、さらに1937年6月の検挙と8月の起訴⁽³⁷⁾が小岩井に「転向」を迫ることとなった。1938年5月31日付の『大阪朝日新聞』には小岩井等検挙の報道があり、最後に「小岩井浄の転向書」が記事として掲載されている⁽³⁸⁾。そこには、「まづしくも心ひとすぢのまこともて

国につくさん日を待つ吾は」という歌があった。中学生時代に文学を志したこともある小岩井にとって、本当の思いの丈を表現したものなのかどうか、あまりに直截な表現に少々面喰らいはするものの、少くとも「転向」を求めた側は、これを諒としたのである。

小岩井は、それに先だって1931年にも治安維持法違反の嫌疑で逮捕されたことがあり、その際、獄中で「転向」を考えたという。そのきっかけは「老母のことであり、また家族肉親、世間等々より「負う恩義、それに対する責任」というもの」⁽³⁹⁾であった、今回の入獄では「転向」が「ここ数年来の問題」であって、「私の転向はまずその自覚から必然の途であるかの如く帰結させられ、念願された」のであって「階級闘争のあらゆる実践から離れよう」⁽⁴⁰⁾と思い到了のである。「階級闘争のあらゆる実践」とは、マルクス主義に基く共産主義運動とその周辺であり、小岩井の「転向」宣言であった。そのきっかけについて、「留置場の中で訊いた出征兵士を見送る大衆の「万歳々々」の声がどんなに大きな感慨を私に与えたことであろう」、しかし「私は数年前から転向を念慮したとはいっても、私の意図は一個の小市民になりきって後半生を自分だけの平和な生活に入るということに過ぎなかった。……家族や世間に対する私の責任は複雑にして深刻なものがあり、……（しかし）国家と民族の必要の前にそれが一体何であろう。そしてこの聖なる—しかし国民としては当然の御奉公（今日多くの出征兵士は現にそれを実践しつつあるのだ）の前には、たとえどんな逆境がよし齎されようとも、私の老母も妻子も少しもそれを意とせず、かえってどんなにか光栄として、悦んでくれるであろうかが考えられる」⁽⁴¹⁾とする。「転向」の動機を家族関係と「国民的自覚」に求めることができよう。これは、当時の「転向」者の多くにとってそうであった⁽⁴²⁾。もちろん、身柄を拘束による精神的苦痛は言うまでもなかろう。しかし、知識人としての小岩井は「転向」に際して、やはり拠り所が必要であった。それが、当時の「国策」として展開されていたアジア進出であった。この「転向」を、外在的な思想としてのマルクス主義を放棄できたのは、以下にも述べる「皇民道」やアジア進出が内在化されたものであったからとは言えまい。いずれの思想も、小岩井にとって外在的であったのではないだろうか。

③上海へ・上海から……東亜同文書院

小岩井は、「転向」後、1939年、国民思想研究所に入所した。尾崎秀実なども寄稿⁽⁴³⁾する『国民思想』誌を刊行する、国策団体である。そして、そこで小岩井は「日本主義思想に沿った論稿を重ねる」⁽⁴⁴⁾。また、小岩井は新人会時代に遊説に行った信濃、この時は上伊那へ3日間の農村問題講習会に講師として参加し、さらに各地に向向いて講演を活発に行なっている⁽⁴⁵⁾。その内容は「事変下の日本の問題について」の意見交換、「皇民道」についての講演などであり、新人会時代とは方向性の異なる内容とはいえ、「導く者」としての立場からの発言であった。しかし、ここからは小岩井が国民精神研究所入所に当たって求められたであろう役割を、誠心誠意こなしていたとみるべきであろう。それは、「転向」した者に求められる立場であり、小岩井にとっても「転向」後の信念の拠り所であったと言うべきであろう。

1940年4月、野田経済研究所上海経済研究所⁽⁴⁶⁾副所長として、上海に渡った。すでに汪兆銘政権が南京に成立して一か月、そして後述するようにその後も、日本の大陸政策は少くとも華中地域においては安定していた。1942年1月、大学に昇格した東亜同文書院大

学の講師に採用された小岩井⁽⁴⁷⁾は、「東亜民族論」を担当する。その成果が同年12月に『東亜研究』第6号に発表された「孫文に於ける民族思想(上)」⁽⁴⁸⁾であり、やがて1944年4月、教授に昇格した。小岩井の東亜同文書院との関わりは、同文書院大学最後の学長となる本間喜一が、幾人かの候補者の中から小岩井を選んだ事に始まる。小岩井を選んだ決定的となった理由は、治安維持法違反で起訴されたとき立派であったとの小岩井事案の裁判官の言葉であったから、という以上のことは分からない。しかし、興亜院による小岩井排除要請に対しての本間喜一の反発と抵抗は、国外故に残っていたリベラリズムとも言えよう。これは、「国策」として多民族共生を実践しようとした満洲国の建国大学⁽⁴⁹⁾の場合とは異なるとはいえ、日本国内からは消えようとしていた「自由さ」であった。

小岩井が渡ったころの上海には、上述のように租界が残っていた。要するに、英米を含め雑居状態の上海であった。そして、1943年、小岩井が同文書院で教鞭を執っている最中に、日本は承認していた正統中華民国政府であった汪政権に租界を返還し、不平等条約を撤廃した。これは建前上、「大東亜戦争」の戦争目的に合致させることが目的であり、「英米帝国主義」と異なる日本は、「東亜解放」の具体策として真っ先に実践しなくてはならないことであった。しかし、現実には、イギリス、アメリカが蒋介石政権に対して行なったのと同じことを、1年遅れで実施したのであった。上海の一般社会の状況は、まさに雑居、人も物も経済もまさにヨーロッパも日本も中国も極めてカオスの状況で混在し、それ故の自由もあった。当時の書院生たちも「無秩序」の巷に入って行って結構楽しみ、上海に居残っていた西洋人たちもその中にいた。そういう混沌の中の自由の中にあった書院には、中国共産党関係者も入り込むのである。中でも、中西功⁽⁵⁰⁾が重要な活動をしていた。その一方で、東亜建国運動などに関与する者もあり、書院への錯綜した評価を生むことになる。

ともあれ、同文書院の「自由さ」が小岩井にとって思想的、精神的休養期間となったと考えることは、必ずしも無理ではあるまい⁽⁵¹⁾。さらに、日本本土とは異なり、その気になれば戦地近くまで行ける上海では、日本軍による占領地区統治の状況はより詳細に情報として入ってくるであろうし、中国人間の「噂」もより高い頻度で耳にするであろう。これもまた、「転向」した小岩井の「抛り所」となっていたであろう「東亜解放」の理念を検証し、実際との乖離を認識する結果につながったと考えられる⁽⁵²⁾。植民地的特権的自由ではあったが、小岩井にとっての上海は貴重な精神的リハビリの期間であったと言えよう。その時に、小岩井を自らの片腕として頼りにしたのが書院大学最後の学長本間喜一であった。本間と小岩井とは、上海以前には面識すらなかったのであるが、一緒に仕事をしながら、俗な言い方をすればウマが合うと認識しあった、としかいいようがない。

引揚げと愛知大学設立

1945年8月、日本は敗北した。それはそのまま、組織的には在外高等教育機関の突然の消滅を意味した。しかし、現実には中国では万里の長城以南に200万人以上の日本人が存在していた。そして、その中には、ほぼ完全武装で基本的に統制が取れている支那派遣軍105万人があった。この支那派遣軍の存在が、長城以南、特に長江流域からの引揚げを、他の地域に較べて比較的容易にし、とりわけ消滅した「満洲国」とは全く異なる戦後を用意す

ることを可能にした。それは、戦後の秩序を如何に維持したかにかかっていた⁽⁵³⁾。国民政府軍が到着するまで、日本軍によって治安維持がなされた長城以南は、以北と異なり、混乱の中で惨死したり孤児となったりする者は、かなり少なかったのである。そして、国民党軍到着後は、順調に治安維持の役割が承継され、日本軍はその役割を終えた。将兵に対しては、法的身分は「俘虜」であっても非武装将兵を意味する「徒手官兵」と呼んでプライドを傷つけぬよう配慮し、将校同士ではしばしば宴が開かれた。さらに日本の将兵に対しては、国民党軍の基準にしたがって「給与」が支払われたのである。これは、近い将来の内戦をにらんでのこと、と評することはできる。しかし、理由は何であれ、それによって200万の日本人が帰国できた事実を評価しないわけにはいかない。

さて、日本軍が降伏文書に調印し、将兵が「集中營」に収容された後、東亜同文書院も引揚げが迫られることになった。この引揚げに際して、同文書院関係者の間ではさまざまなエピソードが語られているし、それが「歴史」となっている。学籍簿を分けて運んだなどである。一つ一つに関しては、確認のしようもない。従って、ここでは、それを可能にしたと思われる事情の紹介に留めたい。それは、小岩井に関係している。小岩井が戦前特高に逮捕され、「転向」したことはすでに触れた。こうした事実は、「反共」を党是とする国民党も掌握していた。何応欽の文書の中に、「岩井浄はアカであり、同文書院の中にはかなりアカがいる。一までも中国においておくと大変なことになる」⁽⁵⁴⁾という意味のものがある。資料を引用した家近亮子氏は「岩井浄」としているが、これは明らかに「小岩井浄」の事だと判断できる。小岩井が国民党に危険人物と名指されたことは、書院の引揚げにプラスの効果を上げたと考えられる。また、日本軍将兵一般への「優遇」とも言うべき対応も、これに加わっていることは言うまでもない。

帰国後、小岩井は「転向」期間中の文章に関しては、認めようとしなかった⁽⁵⁵⁾。なお、日本共産党への復党は、徳田球一に拒否されたという。

愛知大学の設立に関し、小岩井は本間と協力関係にあった。その根本にあるものは、戦時体制が崩壊した後日本に現れた「戦後民主主義」であった。戦後民主主義がまさに芽生え、成長し始めた時期にあつて、自分たちを破壊、破滅の淵にまで追い込んだ戦争への批判的認識が、オピニオンリーダーをもって自任する知識人をはじめ、日本の世論の根柢にあつた。さらに社会主義や社会主義国家への全面的なプラス・イメージが輝きを放っていたのが、1945～1949年であった。この間、同文書院など在外高等教育機関が外地から引揚げ、それらの受け皿として愛知大学が誕生し⁽⁵⁶⁾、中華人民共和国が成立した。

当時の日本知識人は、一括りにすることは乱暴であるが、いずれにせよ二つの衝撃を受けたといってよいであろう。1945年の敗戦と、1949年の中華人民共和国の成立である。敗戦ではアメリカの物量に敗れたとして何とか自らを納得させることができた。しかし、中華人民共和国の成立は必ずしもそうは行かなかった。「進歩」していたはずの日本が「遅れた」アジアに敗れ、さらに歴史段階を飛び越えるように「発展」した社会主義への道を歩み出した、と見えたからである。1946年あたりから国共内戦が激化し、やがて共産党が優勢の内に軍事行動を進めるようになると、それをどのように理解すべきかが喫緊の問題となっていくた。侵略戦争を起こした国家の国民として、また、自らが一度は信じた「進んだ」社会主義への道を突き進む「遅れていた」はずの隣人の姿を前にして、改めて羨望を禁じ得なかった人々も多かった。小岩井も盛んに中国との関係改善を主張し、愛知大学

の国際問題研究所を中心になって設立した。それは実質的に中国研究所であった。また、日中友好協会の豊橋支部がそこにおかれていた。戦前の活動家のあり方として、運動と学問とを車の両輪にしながら中国の新しい動きに非常に関心を持っていたのである⁽⁵⁷⁾。

小結

小岩井の生きた時代を辿りながら、「知識人」の生き方を考えてみた。自ら意識的に世の中に関わろうとした「知識人」は、近代日本においてどのような歩みを残したのだろうか。明治に生まれ、大正デモクラシー時代に教養形成を行い、昭和戦前期に社会主義活動に専心し、挫折、「転向」の後本格的な中国体験を経て、戦後を迎えた小岩井は、地方エリートとして、常に自らを「導く」側においていた、誠実な知識人であった。小岩井にとって、最初に社会主義に触れたことは、地方エリートとしての自覚を自身の想起する人民と結びつくことであった。そして、社会活動の結果としての権力との対峙、そして挫折による「転向」は、他の多くの誠実な知識人同様、自らの「家族」の世界に立ち返ることであった。そして、戦後、小岩井を挫折に追い込んだ権力が崩壊した後、内面的にはどうであれ、一時は権力の側に立った記憶は、上に述べたように、触れたくないものであった。従って、この時に新たに自らの意識の寄る辺として中華人民共和国の成立が進んでいたことは、幸運であった。

小岩井が、戦後日本共産党に復党しようとして拒否され、会いに行った徳田球一にも拒まれたとのエピソードは⁽⁵⁸⁾、結果的には彼の「転向」経験を、獄中で「転向」を拒否した人物によって否定されたということになろう。しかし、復党を拒否した人々と「転向」を余儀なくされた人々との間に、どれほどの思想的距離があるのだろうか。現実の日本社会への臨み方は、いずれもがエリートとしての「導き手」であったのではないだろうか。自らの出自に地方性とエリート性とを合わせ持たざるを得ない知識人であった小岩井にとって、その立場を否定することはできなかった。そしてこのことは、それは日本の明治以降の近代史における「発展」の歴史の代償に十分な目を向けない惧れも内包していた。本来、個人の立身出世と国家の隆盛とが幸運なオーバーラップをしていた明治以来の歴史の総括なくして、戦後は始まらなかったはずである。東亜同文書院の戦後についても、同様である。「侵略戦争の手先」であるとか、「スパイ学校」といった一面的な評価は当然ながら否定されるべきものである。一方、根岸侑をはじめとする同文書院の中国研究の先駆性はその反対に正確に評価すべきである。そして、書院の思想の根柢にあるアジア主義についても、アモルファスさを踏まえて更なる検討が求められている。それは、小岩井のような、マルクス主義を受容し、一度は決起し、そして再度立ち返ろうとした知識人の人生と重なってくるからである。

(1)1945年8月15日の「玉音放送」以前から、支那派遣軍総司令部では日本の敗戦を知り、その後の東京からの命令によって長城以南の日本軍は中華民国国民政府に降伏するよう定められていた。当時、支那派遣軍105万人は、ほぼ完全な状態で要所を掌握しており、蒋介石も彼等に国府軍到着までの治安維持を委ねていた。こうした状況に関しては、拙稿「南京1945年秋」参照。

(2)家近亮子『蒋介石の外交戦略と日中戦争』（岩波書店、2012年10月）に「岩井浄は赤なので、できるだけ早く帰国させよ」との何応欽の指示が引用されている（頁）。何応欽は、当時国民政府軍の責任者であり、国府軍が小岩井を含め、東亜同文書院関係者の履歴を掌握していたことを示している。なお、「岩井浄」とあるのは、「小岩井浄」の誤りであると判断した。中国で「小」の文字が姓の先頭に置かれることは殆んど無く、また日本人の姓名を正確に記さない場合も多く、さらに三文字姓は中国にはまず存在しない。

(3)松本は、周知のように長野県の城下町の一つであり、戦前戦後を通じて多くの人材を輩出している。松本市美術館には出身者である草間彌生の作品が常設展示され、サイトウキネンオーケストラ（現在はセイジ・オザワキネンオーケストラ）が毎年夏、松本で世界的な音楽フェスティバルを開催するという文化都市である。そこからは小澤征爾の師である齋藤秀雄、スズキメソードの鈴木鎮一など、筋を通した生き方、自らの考え方、感じ方を通した人生を歩んだ人々を生んだ世界なのかもしれない。

(4)いうまでもなく、愛知大学の前身は、戦前期、1945年8月まで広くアジア各地に散在していた在外高等教育機関であった。設置者別に見ても、京城帝国大学、台北帝国大学など日本国家の帝国主義政策によるもの、満洲国の建国大学など対日協力政権に関わるもの、学校種で見ても旧制大学、専門学校と多様であった。要するに、在外高等教育機関の在学学生・教員の受け皿となったのである。それらの中でも、東亜同文書院が最大規模であり、滬友会・霞山会との関係から、最大の前身と見なして差し支えない。現に、2015年には愛知大学豊橋校舎敷地内に、建国大学記念碑が設置されている。

(5)例えば、満洲国立の高等教育機関として設立された建国大学については、先駆的な研究として宮沢恵理子『建国大学と民族協和』（風間書房、1997年3月）がある。なお、建国大学については最近三浦英之『五色の虹 満洲建国大学卒業生立ちの戦後』（集英社、2015年12月）がある。後者は専門研究ではないが、建国大学卒業生の「戦後」を辿ることによって、建国大学の教育内容にまで迫ることのできる著作であり、丹念にインタビューを繰り返してできた好著である。もちろん、上記の宮沢の著作にも目を通し、宮沢にも直接会っている。東亜同文書院大学に関しては、本稿でも依拠している『東亜同文書院大学史』（滬友会、昭和57年5月）や『東亜同文会史 昭和編』（霞山会、平成15年8月）などの基礎資料に加え、すでに定評を得ている大城立裕『朝、上海に立ちつくす—小説東亜同文書院』（講談社、1983年5月）などを通じて大学内部を知ることができる。

(6)東亜同文書院に関しては、藤田佳久等の研究により、ビジネススクールとして設置運営されてきたことは、確認できる。また、後述するように、東亜同文会にも「支那保全」を綱領に掲げて始まったにせよ、それを否定する動きがあったことも重要である。しかし、そこにアジア主義の思想的系譜がある以上、主観的には否定したとしても、日本近代の膨脹傾向と無縁では済まされない。また特に、日中戦争時期における同文書院の軍や汪政権、国民党政権、共産党との関係など解明されねばならない問題が残っている。

(7)井上雅二（梧桐）『巨人 荒尾精』左久良書房、明治43年9月、38～41頁。同書は、荒尾の意志を継いで東亜同文書院を設立し、初代院長となった根津一が全体を校閲し、荒尾の参謀本部勤務以来、そして日清貿易研究設立以後も関わりが深かった桂太郎が序文を寄せている。井上雅二は兵庫県出身、東亜会での活動の後、明治31年11月に同文会と合流して成立した東亜同文会では幹事を務めるなどし（『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌』滬友会、昭和五十七年五月、49頁）、さらに南洋協会設立にも参加している。井上雅二に関しては藤田賀久「近代日本のグローバリスト井上雅二—その人物像を中心に」（『多摩大学紀要』16号、2014年3月）参照。なお、前掲『東亜同文書院大学史』22頁にも、荒尾の博多での演説が抄録されている。荒尾精の演説は、井上前掲書37頁参照。

(8)拙稿「根岸信の生涯と中国研究」（『根岸信著作集 第1巻』解説、不二出版、2015年7月）4頁。(9)「日中」というように表現することが、国民国家の枠組み成立以前の時期において適切なのか多岐に疑問はあるが、取り敢えず前近代の日本列島と王朝国家時期の中国大陆という程度に理解しておきたい。

(10)東亜同文会成立時の綱領には「支那を保全す」の一札があり、これが「支那の革命を促進して自疆の実を挙げしむべし」とする東亜会と、「新潮を援助して列強の分割を防ぐべし」とする同文会の対立、さらに当時東亜会会員であった康有為等の扱いの対立があり、その妥協点として出された合意であった（前掲『東亜同文書院大学史』47～48頁）。しかし1909年、「支那を保全す」の文言は東亜同文会綱領から削除されている。その理由としてはこの文言が「支那ヲ余ホド下ニ見タ所ノ立前」で、「友邦互ニ助ケ合フト云フ意味デナイト」国際感情として面白くない（『東亜同文会史 昭和編』80～83頁）からであった。東亜同文書院の中国認識が、現代的国民国家論に支えられていたわけではないにしろ、少くとも根津一等初期の人々にとって対等な日中関係を想定していたことは間違いないであろう。なお、綱領からの「支那保全」の文言削除に関しては、藤田佳久も言及している（藤田佳久『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』中日新聞社、2012年3月、84頁）。もちろん、東亜同文会、東亜同文書院がアジア主義から完全に自由であったなどと強弁するつもりはない。アジア主義そのものが極めてアモルファスであり、1つのイデオロギーとして体系づけられるか甚だ疑問であり、従って、その影響下にあったと断ずることは、

あまり意味のある議論とは成らないのではないだろうか。この問題は、避けて通ることは出来ないが、かといって軽々しく取り扱うこともできないので、本稿では正面から取り上げることはしない。

(11)前掲井上雅二『巨人 荒尾精』41～44頁。その中で、「日本人が一己の私利に眼眩みて、公益を顧みず、一時の便誼から彼等に安賣りをして、爲に物價の權衡を失する弊害」（43頁）を指摘しているが、それに先だって、日本人商人が中国の社会経済にあまりにも無知である点（41頁）を挙げている。これらは、別所でも指摘したが東亜同文書院設立時の教授となる根岸侘が、中学時代に荒尾の講演会でいたく感銘を受けた部分である（前掲拙稿「根岸侘の生涯とその中国研究」3頁）。東亜同文書院の発足時、足を地に着けた中国理解を基本においていたことが窺われる。

(12)前掲拙稿「根岸侘の生涯とその中国研究」。

(13)こうした中国理解の方法論を、「兵要地誌」にすぎない、と批判した人々もあった事は事実である（伊藤武雄『満鉄に生きて』中国新書、勁草書房、1964年9月など）。しかし、性急な理論化と詳細な調査とを比較すれば、どちらが後世の理解に資するかは、明白ではないだろうか。

(14)華中における共産党の軍勢力である新四軍が、国民党軍およびその別働隊である忠義救国軍との死闘を繰り返し、日本軍はそれを「高みの見物」していた。また、1943年には延安から汪政権ナンバー2の周佛海の許へ密使が派遣されるなど、国共両党あるいはそれに日本軍や独自のプレーヤーとしての汪政権を加えた4者が、それぞれに理念と利害とをからみ合わせていたことは、忘れてはならないであろう（拙著『摩擦と合作 新四軍 1937～1941』創土社、2003年2月、参照）。この時期の東亜同文書院大学関係者でも、中西功のように中国共産党員となる者もあれば、本文中に挙げた維新政府・汪政権に協力する書院大学教授もいた。そうした複雑さをあえてそのまま示すことが、現在の研究には必要であろう。

(15)例えば、金子光晴はパリを目指してまず上海に立ち寄っているし（金子光晴『どくろ杯』）、芹沢光治良も同様にまず上海を目指した。上海には日本租界があり、パスポートさえあればそれで問題はなかったのである。

(16)本稿執筆に当たり、思想の科学研究会編『共同研究 転向 上・中・下』（平凡社、昭和34年1月、同書は「東洋文庫」のシリーズとして復刊、2012年2月～2013年3月）を参照した。これは、いまだ「転向」問題を検討するときの出発点となり得る研究である。なお、吉本隆明『マチウ書試論・転向論』（講談社学芸文庫、1990年10月）も、「転向」を論ずる際、避けて通れぬ重要な著作である。

(17)竹内好「近代とは何か」。

(18)以後、小岩井の履歴に関しては、特にことわりのない限り藤城和美「小岩井浄と人民戦線」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープンリサーチ・センター『愛知大学史研究』第3号、2009年度版、2009年10月）、および加藤勝美『愛知大学を創った男たち—本間喜一、小岩井浄とその時代』愛知大学、2011年3月）による。

(19)桜井哲夫『「近代」の意味—制度としての学校・工場』（NHKブックス、1984年12月）。同書には、近代が社会の制度化を進めるとき、学校・軍隊・工場が重要な用具となっていったことを解き明かしている。そして、「立身出世の制度化」は、近年まで機能していた、上級学校に進学することで、社会階層の移動を可能としてきたことを意味している。

(20)「当時は、帝大法学部卒業者は、無試験で弁護士を開業できた。食いつぶれがなかったわけだ。労働者が労働運動のために失職するのに較べれば、容易に労働運動に飛び込むことができた。こうして、どこへ行っても「特等席」が用意されてあることは、彼らにとって居心地の悪い筈はなかった。家族や郎党の輿望を担い、国家の十分な被護のもとに、最高学府に身を置き、衆人に脱帽されながら世に出て行った人々に、菊花に飾られた天皇制の面貌の下に隠された「牙」を凝視することができなかつたのは当然であろう」（前掲『共同研究 転向 上』99頁）とするのは、かなり皮肉なもの言いではあるが、真実の側面の一つを指摘していると言わざるを得まい。

(21)前掲加藤勝美、146頁。

(22)同前書、150頁。

(23)前掲『共同研究 転向 上』、70頁。

(24)同前書、69頁。なお、平凡社『世界大百科事典』（CD-ROM版、Ver.1、1998年）では「思想運動団体」とある。

(25)同前書、71頁。

(26)東大の新人会と類似の組織に早稲田大学の「建設者同盟」がある。東大新人会では中国人などの外国人の動きがよく分からないが、早稲田の建設者同盟では彭湃が参加している。彭湃についてはすでに多くの研究がある。彭湃は、広東省海豊県出身の初期中国共産党農民運動指導者であり、建設者同盟時期のことは、戦後日本社会党の栃木県選出の国会議員であったにいた戸叶武等が彭湃のことを記憶していた（1982年秋、電話インタビュー）。そうした新人会と並ぶような動きがあちらこちらにあった。建設者同盟に関しては、建設者同盟史刊行委員会編『早稲田大学建設者同盟の歴史—大正期のヴ・ナロード運動』

日本社会党中央本部機関紙局（1979年9月）がある。なお、建設者同盟出身の日本社会党関係者としては、上述の戸叶のほかに委員長を務めた浅沼稻次郎や衆議院副議長を務めた三宅正一がいる。

(27)前掲『共同研究 転向 上』73頁。

(28)その中には、後に同文書院と深い関係を持つ石浜知行らもいた。また、黄興の別邸を活動の拠点にしたのは、宮崎龍介の父宮崎滔天の関係による（前掲『共同研究 転向 上』72頁）。

(29)なお、小岩井の題目は「農村青年の目標」であったとするものがある（加藤勝美前掲書164頁）。どちらにせよ、青年知識人の啓蒙の題目である。

(30)同前書、75頁。

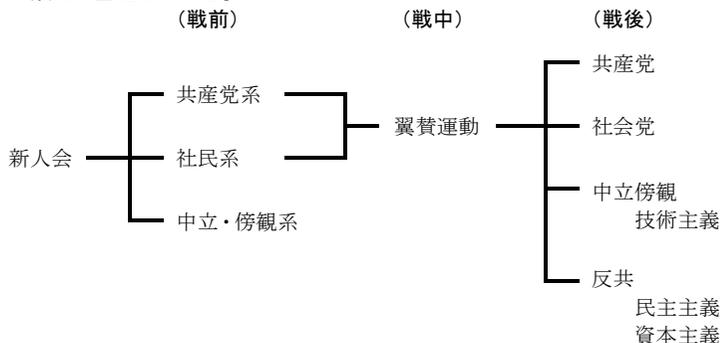
(31)小岩井が、司法試験を受けた後に弁護士となったのかどうかは確認できていない。当時の司法制度から考えると、帝大法学部卒の特権を生かして、無試験で開業したと考えて差し支えないであろう（前掲『共同研究 転向 上』99頁）。

(32)前掲藤城和美、4頁。

(33)これを「こうした「立身出世主義」への反撥は、明治の興隆期を過ぎた時期の一部の学生に共有のもの」とみなす考え方がある（前掲『共同研究 転向 上』98頁）。明治という、個人の立身出世と国家の興隆とがオーバーラップしていた時代が過ぎ去り、「坂の上の雲」が幻であると気がついたとき、個人と社会との乖離が始まったことに、若い知識人が気付いていったといえるかも知れない。しかし、そうした時期にアジアと邂逅した日本の知識青年達は、様々な煩悶を抱えていくことになる。

(34)前掲藤城和美、4頁。

(35)このあと、小岩井は活動の後、逮捕、「転向」するわけであるが、鶴見俊輔はそれを戦後まで見通して幾つかの類型に整理している。



前掲『共同研究 転向 上』116頁より作成

小岩井の場合、「共産党あるいは共産党系の外部団体経由で転向をへて翼賛運動に流れ込んでいくコース」となる。この中には、宇都宮徳馬などが挙げられている。また、「同じコースを途中まで共にしながら、翼賛運動へ流れることを制して、共産党の立場で非転向のコースをつらぬいたひと」「日本共産党の線から転向しながらも左翼急進主義のコースをつらぬいた人」がいた。また、「社民系の団体経由で翼賛運動に流れいった人々」として宮崎龍介・嘉治隆一・室伏高信など、中立傍観者の線に入るコースには清瀬三郎・手塚富雄などを挙げ、どの転向のコースにおいても、新人会員の特徴は、つねに指導者としての地位を保っていることである、とする（前掲鶴見俊輔、117頁）。鶴見はさらに続けて、自分たちは日本全国から選抜試験を受けて帝国大学法学部に入学した日本国民の頭脳の精鋭なのだから、どんな時勢がこようと、どの思想流派に所属をかえようと、自分たちが出て指導しなければ、日本は駄目なんだという考え方、感じ方があることである。この過剰な責任意識が、結果的には、（指導者は決して責任をとらなくていいという）無責任意識につながっており、日本の政治の底をつらぬく海底山脈となっている」と、かなり手厳しく批判している（同前）。全面的に同意することは躊躇われるが、一定の配慮が必要な視点である。

(36)人民戦線との関わりについては、前掲藤城和美、参照。

(37)「一二・五事件」である（前掲加藤勝美、242～243頁）。小岩井の逮捕については、前掲藤城和美、108頁には1937年6月の「社大党躍進」執筆後の事を取り上げており、小岩井の「転向」にはこちらの方が大きな意味を持つ。

(38)前掲加藤勝美、242～243頁。

(39)前掲藤城和美、109頁、前掲加藤勝美、211頁、245頁。

(40)前掲加藤勝美、245頁。加藤は小岩井の「新しき出発（転向感想）」を『誠明公論』昭和13年8月

号から引用している。『誠明広論』は大阪誠明会出版、1938年6月創刊号、1943年第6号まで出版が確認できる。

(41)前掲加藤勝美、246～248頁。

(42)「転向の動機と罪態との関係調」司法省保護局「思想犯保護対策者に関する諸調査」『司法保護資料』第33輯、1943年3月、198頁、所収（前掲『共同研究 転向 上』19頁）。

「転向の動機と罪態との関係調」

	共産主義	無政府主義	類似宗教	民族運動	計	百分率
総括	2403	55	153	60	2671	100.00%
信仰上	52	4	3	-	59	2.21%
家庭関係	677	16	21	5	719	26.92%
理論的矛盾の 発見	299	5	6	2	312	11.68%
国民的自覚	768	19	52	13	852	31.90%
身上関係	231	6	16	2	256	9.58%
拘禁に因る後悔	299	2	50	34	385	14.41%
その他の原因	76	3	5	4	88	3.30%

※なお、「身上関係」では小計が「256」であるが、原文のまま。

(43)たとえば、尾崎は「支那事変の歴史的展開」と題する小冊子を同所より刊行している（『国民思想パンフレット』第1巻第5号、昭和13年11月）。

(44)前掲藤城和美、110頁。

(45)前掲加藤勝美、273頁。

(46)前掲藤城和美、加藤勝美ともに「上海経済研究所」としているが、こうした名称の民間あるいは官立の研究機関は、上海では実態を確認できない。「野田経済研究所」の「支所」と見るべきであろうか。

(47)小岩井の同文書院入りの経緯は、前掲加藤勝美、312～314頁。ただし、加藤自身も断っているように、出所は『毎日新聞東海版』であり、それも本間喜一からの伝聞によるもので、文献資料での確認はできていない。また、本間が小岩井を採用しようとした理由についても、あくまでも本間の「思い」が述べられるだけである。

(48)（下）は『東亜研究』第65号、1943年3月刊行。

(49)満洲の建国大学については、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』風間書房、1997年3月、参照。最近の良質なルポルタージュとして三浦英之『五色の虹—満洲建国大学卒業生たちの戦後』集英社、2015年12月、がある。

(50)中西功については、福本勝清編『中西功訊問調査—中国革命に捧げた情報活動』亜紀書房、1996年7月、参照。中西は、特高に逮捕され、尋問を受けたとき、ほぼ洗いざらい自白している。

(51)前掲藤城和美、112頁。

(52)藤城は「動員された書院学生の多くが「皇軍」の残虐を目撃して大学の理念との相違を自覚していったように、小岩井もまた同文書院大学での研究・教育活動の実践を通して、嘗て大衆活動の中で培われた人間的資質を取り戻していったのであった」と、述べる（前掲藤城和美、113頁）。

(53)拙稿「南京1945年8～9月—支那派遣軍から総連絡班へ—」（愛知大学国際問題研究所『紀要』143号、2014年3月）。

(54)家近亮子『蒋介石の外交戦略と日中戦争』岩波書店、2012年10月、275頁。

(55)小岩井は、その『還暦記念論文集』の自らの業績一覧に、自らの「転向」期間中のものは、「戦争と社会生活」（『改造』1939年5月号）、本文中に示した「孫文の民族思想」のみを掲載し、国民精神研究所でのものは、排除している。

(56)愛知大学が旧第15師団跡地を校地として発足したことには、軍事施設の平和利用という意味もあり、建学の理念とも相俟って、平和主義を主張することになる。

(57)なお、現在の中国研究所は、中華人民共和国が成立する前の1946年に東京に設立され、平野義太郎が所長となった。

【小岩井浄年譜】

- 1897 (明治 30) 年 6 月 9 日 誕生
- 1905 (明治 38) 年 4 月 島立小学校入学
- 1911 (明治 44) 年 4 月 松本中学校入学
- 1915 (大正 4) 年 6 月 松本中学校退学、宮田小学校代用教員 (～1916 年 6 月)
7 月 専門学校入学者試験検定願 (長野県立飯田中学校長宛)
- 1916 (大正 5) 年 1 月 検定試験受験 (県立諏訪中学校)
6 月 第一高等学校入学第一部丁類
- 1919 (大正 8) 年 9 月 東京帝国大学法学部政治学科入学
三輪寿壮らと中国旅行
新人会
- 1921 (大正 10) 年 シベリア旅行
- 1922 (大正 11) 年 3 月 東京帝大卒、大阪へ
4 月 日本農民組合顧問弁護士
7 月 第一次共産党結成に参加
- 1923 (大正 12) 年 6 月 第一次共産党検挙事件
小岩井、市ヶ谷未決監収容 (～12 月釈放)
- 1926 (大正 15、昭和元) 年 5 月 小岩井検挙、堺刑務所入獄 (～1927 年 1 月)
- 1928 (昭和 3) 年 11 月 三・一五事件公判開始、小岩井、布施勝治らと弁護団
- 1929 (昭和 4) 年 大阪市議選に当選
- 1931 (昭和 6) 年 4 月 モップル事件で小岩井検挙
10 月 大阪市議選、当選
- 1932 (昭和 7) 年 9 月 小岩井、大阪横堤へ
- 1933 (昭和 8) 年 2 月 「自由農民学校」開校→解散
- 1934 (昭和 9 年) 2 月 山本宣治の墓参
- 1935 (昭和 10) 年 4 月 『冬を凌ぐ』刊行
10 月 単身上京、日本政治経済研究所設立
- 1936 (昭和 11) 年 12 月 一二・五事件、検挙
- 1938 (昭和 13) 年 12 月 小岩井、国民思想研究所入所
- 1939 (昭和 14) 年 1 月 「民族の問題」執筆
- 1940 (昭和 15) 年 4 月 上海経済研究所副所長 (→中支経済研究所では?)
- 1942 (昭和 17) 年 1 月 東亜同文書院大学講師
12 月 「孫文に於ける民族思想 (上)」 (『東亜研究』第 65 号)
(下) は 1943 年 3 月刊行
- 1944 (昭和 19) 年 4 月 東亜同文書院大学教授
11 月 上海江南造船局にて書院学生爆撃で死亡
- 1945 (昭和 20) 年 8 月 ポツダム宣言受諾
- 1946 (昭和 21) 年 3 月 東亜同文会解散
11 月 愛知大学設立
- 1955 (昭和 27) 年 11 月 小岩井、愛知大学学長 (第三代)
- 1957 (昭和 32) 年 6 月 中華人民共和国憲法翻訳
9 月 アジア・アフリカ法律家会議参加
- 1959 (昭和 34) 年 2 月 小岩井、没